

「禽獸」にきて、その不安は次第に、明瞭な形で現れてくる。

終章

終章で、本論文の分析結果をまとめた。新八は解剖という科学的手段を通して、死を超越する方法を見つけ出し、さらに、古い因習を排斥し、自由な生を追求しようとする。その背景にあるのは川端の万物一如輪廻転生思想である。一方、「死体紹介人」には、この思想の救いに対する不安のきざしも見えている。川端が「昭和六年七年頃から、虚無的な、非行動的なあり方の方に移っていった」と言われている。その原因は、万物一如輪廻転生思想の破綻にあるのではないか。「死体紹介人」は昭和五年頃の作家川端にアプローチする重要な作品であり、川端文学研究において、決して無視してはいけない作品なのである。

埋め込み文をつくる『の』に関する研究

森田 美恵子

凡例

- 0、研究の課題と目標
- 1、先行研究における「の」とその問題点
 - 1.1. 準体助詞と形式名詞
 - 1.2. 補文標識と名詞化辞
 - 1.3. 参照点構造
- 2、「の」の統語的特徴
 - 2.1. 古典語とのつながり
 - 2.2. 「の」節と主文との関係
 - 2.2.1. 「の」節に後接する助詞
 - 2.2.2. コピュラとの共起
 - 2.2.3. 「の」節の修飾と非修飾
 - 2.3. ガノ可変
 - 2.4. 「の」の名詞性
- 3、「の」の意味と解釈
 - 3.1. 節補語の意味と解釈
 - 3.2. 分裂文の意味と解釈
 - 3.3. 内在型の意味と解釈
 - 3.3.1. 主要部の特定
 - 3.3.2. 内在型と副詞節

3.3.3. 内在型の意味

3.4. 「の」の連続性

4. 「の」の生態的研究

4.1. 動詞「助ける」の分布

4.2. 「の」の分布

5. 「の」の全体像と今後の展望

分析データ(表)

注・参考資料・参考文献

要 旨

日本語には埋め込み文をつくる代表的な形式として「の」「こと」「ところ」「と」などがあるとされている。埋め込み文の「の」とは、次のような文を指す。

- (1) a. 太郎は子どもに「川へ遊びに行く」のを禁じた。
 b. 太郎は子どもに「川へ遊びに行く」ことを禁じた。
 (2) a. 太郎は子どもに「放課後まっすぐ家に帰る」のを命じた。
 b. 太郎は子どもに「放課後まっすぐ家に帰る」ことを命じた。
 (3) a. 「花子がワインを冷やしておいた」のを太郎が一人で飲んでしまった。
 b. 「花子が冷やしておいた」ワインを太郎が一人で飲んでしまった。
 (4) a. 「シクラメンの鉢を大切に育てていた」のが、この寒さで

花がすっかり枯れてしまった。

- b. 「シクラメンの鉢を大切に育てていた」のを、猫が倒してしまった。

- (5) 「今朝髭を剃った」のが夕方にはもう伸びてきた。

このように、「の」は実に様々な文に生起する。先行研究においては、その多様さゆえに、「の」が関わる文のごく一部分だけに焦点が当てられ、それぞれに考察が進められてきた。日本語学では主として、(1) (2) における「の」と「こと」の使い分けを中心とした考察が続けられてきた。また、生成文法では、主要部内在型関係節と呼ばれる (3a) (4a) (4b) の文の存在が指摘され、通常の関係節 (3b) との関係が問題にされてきた。また、(4a) は副詞節と呼ばれる文であるが、(3a) (4b) とともにすべてを副詞節として捉える立場もある。さらに、最近では認知言語学の視点から、主要部が言語化されていない主要部内在型関係節 (5) (＝野村2001の例) が存在することから、通常の関係節に還元できることを前提とするような、還元主義的考察への批判が提出された。しかし、これらの考察では、当該の構文とそれ以外の「の」との関係について、まだ明らかにっていない点が多い。この他、分裂文と呼ばれる文もまた、この埋め込み文をつくる「の」の一つであるとされている。本稿は「の」について、これまで指摘されてきた、それぞれの構文様のものである、もう一度「の」の働きという観点から捉えなおし、そこにど

のような連続性、あるいは非連続性が存在するののかについて考察したものである。

「の」の統語的な側面としては、従来指摘されてきた統語的制約と呼ばれるものを検証し、「の」がどのような統語的環境に生じ得るのかを再提案した。また、その意味的側面としては、まず、埋め込み文の「の」が、主文との関係においてどのような意味的な制約を持ち、文全体としてどのような解釈を要求するのかを考察した。次に、表現事態の捉え方という観点から、「の」による表現が生起する意味的環境について、どのような表現において選択されやすいのかを明らかにした。また、その傍証として、近代から現代にかけての「の」の使用の推移について、生態論的分析を試みた。さらに、これらの各章では、それぞれの「の」を独立した構文様のものとして扱うのではなく、隣接表現との関わりに重きを置いて論じた。そして、実際の言語資料を詳細に検討することによって、「の」による表現特有の意味的特徴を記述した。最後に、結論として、当該事態がなぜ「の」によって捉えられ、表現される必要があるのか、また、その事態認知が言語形式の選択にどのように結びついているのかを明らかにした。ある言語表現が、隣接表現とどのような関係にあるのかを考えることは、事態認知における認知主体のあり方やその認知過程を明らかにするために、大きな意味があると考えている。このような認知の仕組みを捉えることで、日本語における認知のあり様をさらに今後明確にしていきたい。

『玉藻前物語』の研究

岩 木 委 子

私達日本人が「狐が登場する伝説・伝承を挙げよ」と言われた時、まず思い浮かぶ物語は何であろうか。

おそらく、必ず名前が挙がる物語に安倍晴明の母としての葛葉狐——信太妻——又は、その系統の『日本国現報善惡靈異記』（以下『日本靈異記』と記す）の昔より伝わる所謂、異類婚姻譚の「狐女房譚」と、傾国の美女と化して三国を荒らし、死しても那須野の殺生石となり、能・謡曲・歌舞伎や小説等の題材として葛葉狐と同じく現在まで長く広く人口に膾炙した、希代の大妖「九尾の狐」の物語を数えることが出来るであろう。

又、それ程、社寺に明るくない人であっても、稲荷神社の存在位は知っていると思われる。

これらの狐譚に登場する狐を分類すると、まず、稲荷神社の神使や茶枳尼天の乗り物としての神仏に近しい狐である、神獸・聖獸と、主に野に在り、人と交わったり、人に仇をなしたり、または恩を返す狐妖に大別される。

そして、その狐妖も上代より『日本靈異記』上巻の第二話「狐を